



シマ  
の  
一  
族

第一部

峰  
伏  
路

新風舎

シマの一族 第一部

目次

第一章	起源と終末	9
-----	-------	---

第二章	運命の姉妹	27
-----	-------	----

一	湿原のシーズン	28
二	平原の墓標	32
三	デス・ウイング	44

第三章	漆黒の漂流者	55
-----	--------	----

一	いとしき黒太子 <small>フウリー・ブラック・プリンセス</small>	56
二	純白のマドンナ	63
三	夏の惨劇（ニャンギラス伝）	77
四	死は驕 <small>おご</small> る	86
五	破断界	93

第四章	一族の永き黄昏	103
-----	---------	-----

一	疫病蔓延	104
二	迷宮のアンドローラ	111
三	月下の兵 <small>つわもの</small>	134

第五章	転生回天	145
-----	------	-----

一	スノーホワイト・ブライド	146
二	風に疾 <small>はし</small> るコン	156
三	雨の夜の饗宴	172
四	再帰 <small>リカーシヴ・ゲイト</small> の門	190

外伝Ⅰ	「起源以前」	197
-----	--------	-----

シマの一族 第一部

第一章 起源と終末

ある年の十月、秋の抜けるような蒼天の日、何の前ぶれもなく一匹の猫がわが家に現れた。それがすべての始まりであった。

それはトラ縞のやせた猫で、迷い込むようにわが家に上がるや、妻の与えた残飯にガツガツと食らいついた。よほど空腹だったのだろう。猫は食べながらも「ニャオ、ニャオ、ニャオ」と鳴き続け、それが滑稽だと妻と私は笑い転げた。食べるだけ食べると、猫はフイと姿を消したが、まもなく、押し入れて寝込んでいるのが発見された。こうして、その猫はわが家に住みつくことになった。

私はその猫を「シマ」と呼ぶことにした。この名前はとくに考えて付けたわけではない。見たそのままである。

ただ、当時私が勤務していた病院に「島」という年配の、いかにも偉そうな先生（精神科医）がいたため、心外にもいろいろ勘ぐられてしまった。もつとも、例えば「シマ！ このなまけものめ！」とか「シマは、何てしようのない奴だ」とか、怒鳴ったり説教したときに、私の気分の中に何らかの痛快な含みが全然なかったのかと問われれば、それはいささか微妙な問題ではある。その先生は、たまにマスコミが取材にくる結構な有名人であったが、性格温厚、十分に尊敬に値する人物である。仕事ぶりは鷹揚たうようで、さすがにパフォーマンスは年季が入っていて、何かと外廻りが多かった。

シマは、穏やかでマイペースの猫らしい猫であった。とてもおとなしく、わが家を訪れ

た若い職員たちにくら<sup>いじ</sup>りまわされても、だいたい黙ってされるがままだった。また子供が好きで、3歳にならない息子や近所にある病院付属の託児所の幼児たちに、好んで撫でられていた。人間や動物の美醜に関しては、妻と私はどちらかという意見が食い違うことが多いのだが、シマについては一致した。もちろん、相当の美形であるということだ（なお、シマは雌である）。

シマは何処から来たのか？ これはおそらく永遠の謎である。

当時私の住んでいた所は、北海道の東部、釧路湿原に隣接した鶴居村である。そこでは、東京都二十三区とはほぼ同じ面積に、およそ二千人が居住していた。わが家は病院の付近に建てられた医師住宅の一つだったが、最寄りの農家まで歩けば三十分以上かかる孤立した地域である。ちよつとした買い物でも、車で十五分はかかってしまう。一番近い喫茶店といえども、釧路市街まで約五十分かけて出張らなければならなかった。

この地に、どうしてシマのような猫がやってきたのか。足の裏はだいたい傷ついていたが、やつれ方や汚れ方の程度から、それ程長い期間放浪していたわけではなさそうである。人によく馴れていたし、キッチンとしつけられていた。砂を入れた猫用トイレはすぐに利用したし、食事時には椅子にチョコンと座って食卓についたが、けっして人前ではテーブルの上にあがることはなかった。後に聞いたことだが、獣医によるとシマはこのとき一歳前後で、その年の冬が初産だった。

どこか別の家庭で飼われていたシマは、ある日突然、この地に捨てられたのであろうか。しかし、猫を捨てるのに、わざわざこんな場所を選ぶのだろうか。なんらかの偶然で、置き去りにされたのだろうか。「シマ」とは仮の、第二の名前であり、彼女は本当の、最初の名前を持っていたに違いない。しかし、すべては想像の域に留まる。猫との接触時間の長い妻は、ある程度猫語を解するようになったが、シマの前歴を聞き出すことはできなかつたようである。

シマは私たちの息子の「瞬<sup>しゅん</sup>」とよく遊び、それはやがて一族の伝統的習性となった。

シマは、ずっと以前から居たかのように、わが家に住み込んだ。だんだん贅沢になり、多少凶々しくなったが、特に問題はなかった。子供の頃猫を飼っていた妻は、喜んで面倒をみていた。猫は概して無表情な動物であろうが、シマは疑いなく生き生きとした表情に富んでいた。このことは、妻とよく話し合ったテーマである。ビックリした顔、何をすんだという顔、くつろいだ顔、落ち着かない顔など、実にはつきりしていた。

猫の通例として、実用的な観点からはシマもまず何の役にも立たない。よく眠り、よく食べる。しかも、寄食者であることにまったく何のためらいもない。犬のような主人への忠誠や媚びは、これはもうどこをどう探しても一片も見つからない。にもかかわらず、人間の方がせっせと食餌<sup>しよくじ</sup>を用意し、トイレを掃除し、撫でてさすって機嫌をとっている。思うに不可思議な生物である。

ついつい、無駄と知りつつ、説教の一つもしてしまふ。すると、猫は決まって大きなあくびをするのである。これは人類の普遍的な体験ではないだろうか。

その傍証かどうか分からないが、次に『朝日せんりゅう』（日時忘失）から引用する。

飼い猫に意見をすればあくびする（前橋市 松本由美子）

シマは賢い猫であった。まず、戸を開けるのがとてもうまい。鍵の掛かっている戸や窓は、たちまち器用に開けてしまった。それから、ネズミを獲るといふ、古典的な技を身につけていた。世が世ならば、貯蔵食料の守護者、優秀な狩人としての声望せいぼうを得ていたに違いない。度々シマは獲ってきたネズミを得意そうに運んできた。そして、自分の子供たちに与えて遊ばせ、また一緒に遊んだ。これは、微笑ましいとも、猫の当たり前の本能行動とも言えようが、家の中で派手にやられた場合、人間にとってはたまったものではない。ただ最後はきれいに食べてしまったのが救いではあった。

話が少々前後したが、シマは、わが家に来たその冬に三匹の子猫を出産した。すべて雌猫であった。シマのお相手は、付近に生息する通称「原野猫」に属する白黒混じりのノラ猫で、妻によると「とんでもなくミグサイ（＝醜い）奴」であった。私は、「ワイルドな魅力があるんじゃないか」とか、「お嬢さんの好奇心だよ」とか言ってなぐさめたが、妻

立ち読みページはここで終わります。

お立ち寄りありがとうございました。

またのご利用をお待ちしております。



新風舎  
立ち読み横丁